

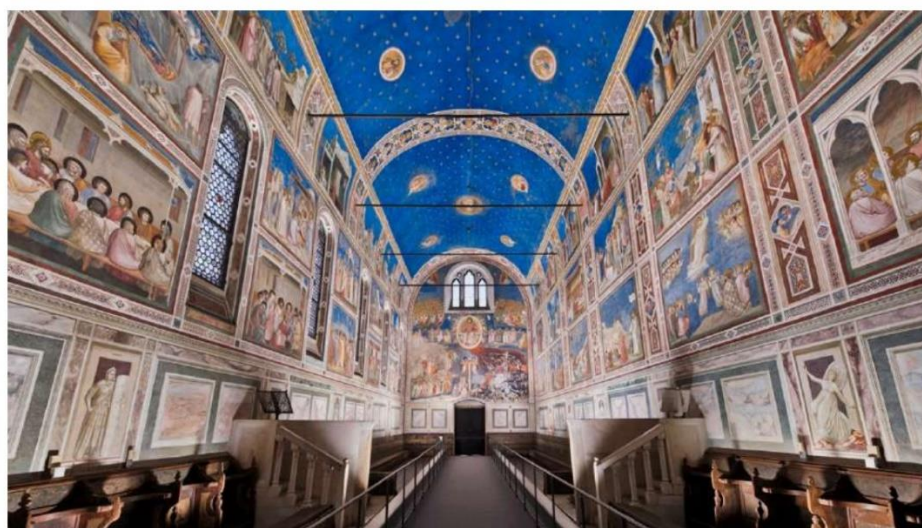
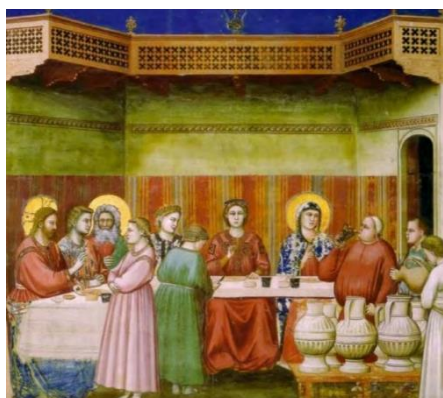
2022年

アンドレア師のキリスト教美術史講座 受講ノート VIII

in 船橋学習センター「ガリラヤ」

from 蕨由美の Facebook

---



アンドレア師のキリスト教美術史講座

In 船橋学習センター「ガリラヤ」

2022年1月26日

今日は、船橋学習センター「ガリラヤ」のアンドレア師の「聖書と美術—神のおもてなし—」をオンラインで受講しました。



旧約でも新約でも聖書では、食事は「神のおもてなし」としてとても重要なことで、『創世記』ではまず人間に被造物を食べ物として恵まれ、『出エジプト記』では過越しの食事を命じられるなど、食べ物と食事は神と人のつながりとされます。

新約で最重要なのは「最後の晚餐」で、イエスは弟子たちと平等に食事をされます。

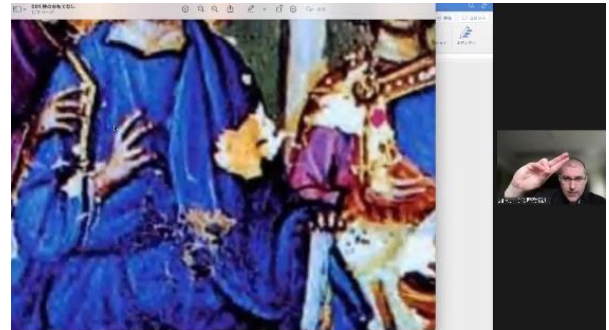
一緒に食事することは、友情の絆であり、(美味しい食事でも一人では、エサ?) この2年間のコロナ禍の中、誰もが痛感していることです。

今回のテーマは、ヨハネ伝2章「カナの婚礼」。イエスの最初の「しるし」もこの披露宴の場面でした。

7世紀のギリシャのアトス山のミニアチュール(細密画)のイコンでは、左にイエスと母マリア、中央に新郎新婦、右はイエスが甕に水を満たさせる場面。新郎新婦は冠をいただき、新郎はイエスと同一であることを暗示させる。イエスは王座に座り、母の注文を聞きながら、右手は三位一体を意味し祝福するポーズ、左手に聖書を持つ。建物は教会堂を表す。



カナの婚礼、ミニアチュール、XII世紀、アトス山、ギリシャ。



ジョットの絵は、左端にイエス。母マリアは右端で使用人にイエスの命に従うように告げる。宴を囲む人々の風俗は、当時の13~14世紀の姿。上部のバックは、ジョット独特の青色である。

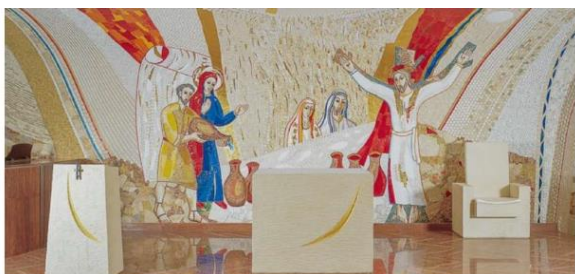


ジョット、カナの婚礼、スクロヴェーニ礼拝堂、パドヴァ、イタリア、1303年-1305年。

ヴェロネーゼの絵は、16世紀バロック期の作品。当時のベネチアの反映を写すように国際的な民族、多彩な仕事人、貧しい人も裕福な人も数えきれない人物が描かれている。中央のイエスは、ダヴィンチの最後の晩餐のイエスの姿を映す。



パオロ・ヴェロネーゼ、カナの婚礼、ルーヴル美術館、パリ、1562年 - 1563年



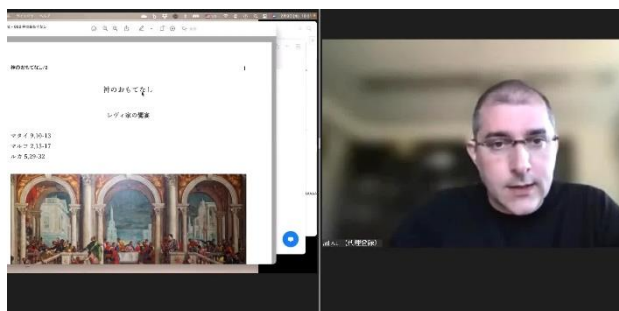
M.I. Rupnik, カナの婚礼、PONTIFICIA FACOLTÀ DI SCIENZE DELL'EDUCAZIONE "AUXILIUM"、ローマ、2003年。

2003年のM. I. Rupnikのモザイク画は、カナの婚礼とイエスの受難が一体となった構図で、御血＝葡萄酒が、時空をつなぐ。新しい葡萄酒は新しい契約、婚礼は神と神の民の愛のしるし。このカナの宴会はミサとして、今も繰り返されています。ヨハネの福音の最初のしるしとしてのこの婚礼の場面は、イエスの最後の晩餐に集約される核心を語るものでした。

2022年2月9日

今日の午前中は、船橋学習センター「ガリラヤ」のアンドレア師の講座「聖書と美術－神のおもてなし」の2回目をオンラインで受講しました。

最近はコロナ禍や家族内でも生活の時間差で、同じ食卓を囲む機会が少なくなっていますが、食事を共にすることは、その人の人生に触れることであり、また食事の準備から片付けまでが人生の物語でもあり、イエスは食事の場を救いの機会とされました。



今回の第一のテーマは、レヴィ家の食事。

マタイ9章・マルコ2章・ルカ5章ではほぼ同じ内容で、病気の人を癒す物語に続けて、徴税人レヴィ(＝マタイ)の召命を、そしてその家での食事の場面を書いています。

イエスが罪人や徴税人と一緒に食事をされるのを非難されて、「医者が必要とするのは、病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くため」と言って、身体だけでなく、心に負い目を持つ人々に憐れみと癒しを与えられたという箇所です。

美術解説は、パオロ・ヴェロネーゼの「レヴィ家の饗宴」について。



パオロ・ヴェロネーゼ、「レヴィ家の饗宴」、アカデミア美術館、ヴェネツィア、1573年

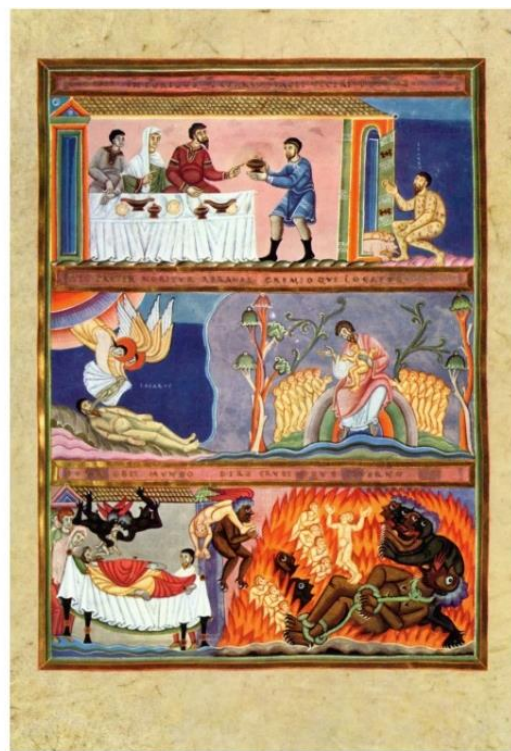
この絵は修道院から「最後の晩餐」の絵を依頼されて制作されたが、社会の下層の人々や酔っぱらい、犬や猫まで描かれたこの絵は、「最後の晩餐」のテーマにふさわしくないとの物議をかもし、結局この題名になったとのこと。ヴェロネーゼにとっては、社会から排除された人々への憐れみこそ「最後の晩餐」であるという考えがあったのでしよう。



第二のテーマは、ルカ 16 章の「金持ちとラザロ」のたとえ話。

できもので覆われた貧乏人のラザロは金持ちの食卓から落ちるもので飢えをしのごうとしていたが、死んでしまい、また金持ちも死んで葬られた。死後、ラザロの魂はアブラハムの懷に抱かれたが、一方食事を分かちあうことをしなかった金持ちは永遠の火炎の中でもだえ苦しむという単純な教訓の話です。

美術の例は、7 世紀の福音書のイコンと、16 世紀のヤコポ・バツサーノの作品。



エヒタナハの福音書、690年頃、Bibliothèque nationale de France



ヤコポ・バツサーノ、金持ちと貧乏人のラザロのたとえ、クリーブランド美術館、1554年

後者は、犬にできものをなめられている病人ラザロと、彼をかえり見ることもなく食卓を囲む金持ち家族三人と、中央には考え込んでいる小さな子供が描かれています。

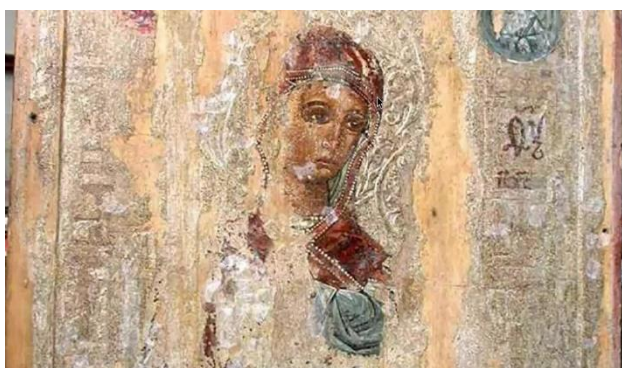
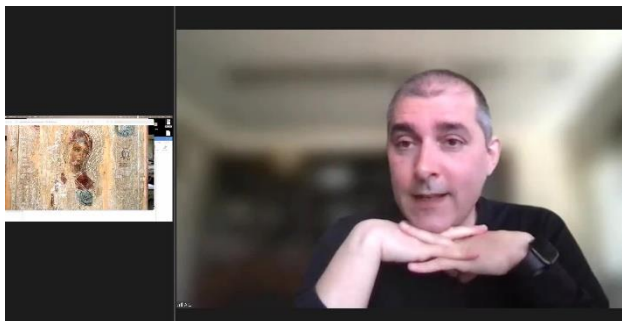
作者は無関心こそ差別的行為であり、ポケットから何か出そうとしつつ憂いている子供は私たちのことと言っているようです。

「神のもてなし」の話は、次回また続きます。

2022年3月9日

午前中、船橋学習センター「ガリラヤ」のアンドレア師の「聖書と美術—神のおもてなし—」の3回目を受講しました。

講座のテーマに先立って、今現在ロシアの軍事侵攻に耐えているウクライナへ支援などに触れ、ウクライナのイコン「キエフの聖母」を紹介されました。



キエフの近くのリヴィウに保管されていた 16 世紀のイコンで、ギリシャのアトス山の修道院にそのオリジナルがあり、Akeropita=すなわち天使の手で描かれたと伝えられる貴重なイコンとのこと。11 世紀に東西に分裂していた教会でしたが、第 2 バチカン公会議後、エキュメニカルな動きが高まり、2001 年ヨハネパウロ二世がウクライナに訪問した際に、「平和のしるし」として、ウクライナ正教会とウクライナ東方カトリック教会から贈られ、バチカンに所蔵されています。

「人間性」と「神が宿っている」象徴としての赤い衣をまとい、少し寂しげなお顔で、ウクライナの戦争の歴史を見つめられているよう。右にロシア語で「神の母」、その上には保管施設のシールが

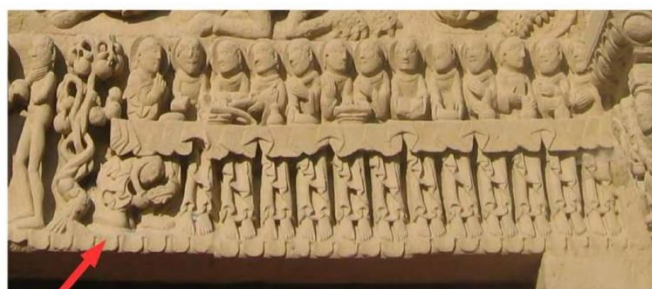
残っています。

現在、ウクライナでは貴重な美術芸術品を戦禍から守るための移動等に苦心しており、バチカンも美術品の救済に努力しているとのことでした。

さて、本題の講座は「罪深い女」がテーマ。パリサイ人の家の食卓で、「罪ぶかい女」がイエスの足を涙でぬらし髪で拭いて貴重な香油を塗るというルカ伝 7 章の有名なエピソードで、「あなたの信仰があなたを救った、安心して行きなさい」と罪を許されるイエスの言葉がテーマです。

美術の一例目は、12 世紀のフランスの「マグダラのマリア教会」のレリーフです。ルカ伝の「罪深い女」とこの教会名にもなっている「マグダラのマリア」は同一視されてきましたが、それは間違いで、イエスにより七つの悪霊を追い出されたマグダラのマリアは、イエスの磔刑を見守り、埋葬を見届け、イエスの復活に最初に立ち会った女性でした。

レリーフには、誰にも見られずにイエスの足に香油を施している女性、その左に創世記の「いのちの木」が彫られ、この「善悪の木」から罪がゆるされたことを暗示しています。



もう一例は、ヴェロネーゼの「ファリサイ派のシモンの家での夕食」1556 年頃の作品です。

右側にイエスと、その足に香油を塗る女性と、イエスと視線を合わせる女性。この二人は同一人物で、後者は罪を許された姿を物語っています。16 世紀の風俗が描かれていて、シモンは当時の裁

判官の服装で、イエスと女の双方を裁こうとしています。



香油を施す女性についての各福音書の視点は異なり、ルカ伝では本来の「赦し」の物語、マルコ伝 16 章では一人の女（罪ぶかいとは書いていない）により香油をイエスの頭に注ぐことがこれから起こる「受難と埋葬」を意味することが主題、ヨハネ伝 12 章では「マリア」が香油を足に塗る場面が死からよみがえったラザロの家の出来事であることから「復活」を想起させます。

そしてマリアのこの行為に学んだのであろうイエスが、最後の晩餐で自ら弟子たちの足を洗うことにつながっていくとのことでした。

2022 年 3 月 23 日

今日は午前中、 アンドレア レンボ師の講座『「聖書と美術」—神のおもてなし』の 4 回目をオンラインで受講しました。



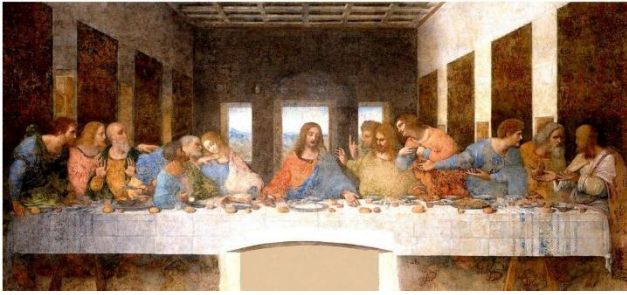
神ご自身が主催される「おもてなし」は救いの機会、共観福音書（マタイ・マルコ・ルカ）は、小羊を屠る除酵祭の第一日目のこととして過越の「主の晩餐」を記述している。子羊のかわりにパンとブドウ酒が、イエス自身のしるしとして、聖体の制定がされる場面です。

パウロの「コリント人への手紙」12-17 にも記されているが、パウロ自身はイエスには会ってなく、共観福音書からイエスが共同体の中に生きているという核心を伝えている。

一方、ヨハネ福音書は、その前日に、弟子の足を洗う場面と、ユダによる裏切りの予告を記述し、最後の晩餐の場面はない。子羊を屠る日＝イエスの十字架の日となり、共観福音書と一日ずれていることが、研究者間でのめごとでした。

レオナルドダヴィンチの「最後の晩餐」は、この「裏切りの予告」での弟子たちのおどろきを描いている。友情の顔を見せながら裏切る行為は、とても恐ろしいことなのです。

この絵は、1495～8 年に描かれましたが、新大陸発見など新しい時代に、ルネッサンスの幕開けを表す作品で、伝統を守りながら遠近法など新しい描き方が導入された傑作です。



後の三つの窓は「三位一体」を意味し、エルサレムまたはミラノの風景を描く。最後に描かれたというイエスの悲しむ顔は未完成で、人性と神性が共存するように神秘的である。

イコンの伝統から、赤の服は人性、青のマントは神性のしるし。その赤服の右手（左側）は下向きでパンへ向き、青衣の左手は上を向く。

弟子は3人ずつ4つのグループで、それぞれ自然の姿勢・自発的な姿勢・意図的な姿勢を見せる。イエスの左は「愛弟子」。彼が「ヨハネ」とされたのは後のことで、実はわからない。その愛弟子にシモンペトロが、イエスの言う裏切者が誰かと尋ねる瞬間と、弟子たちのおどろきをリアルに描いている。



左三人目のユダは、右手でお金の袋を持ち、左手でパンを取ろうとしている。「ユダがパン切れを受け取ると、サタンが彼の中に入った」という記述の寸前の場面である。

12人の弟子は、それぞれ特定ができるということで、一人一人の解説がありました。

もう一つの「最後の晩餐」は、サルバドールダリの1955年の作品の紹介でした。

ガリラヤの風景に近代的な建物、上部後に十字架のイエスの姿。弟子たちは、修道士のような姿で悲しみに沈んでいる。ダリは、十字架のいけにえのイメージに加えて、日の出の明るさを描き、イエスの復活を表しているとのことでした。



2022年7月13日

今日は、イタリアから帰られたばかりのアンドレア レンボ講師による「聖書と美術」の講座が久しぶりに再開され、午前中さっそくオンラインで受講しました。

テーマは「スクロヴェーニ礼拝堂」で、パドヴァのこの礼拝堂のジョットのフレスコ画は、西洋美術史上、もっとも重要な作品といわれています。



今日は、この本題に先立ち、ミラノ会日本管区長としてのお仕事でイタリアに行かれた時のおみやげ話をしてくださいました。

ミラノ会総会が行われたのは、北イタリア郊外のベルガモの有名な神学校。

教皇ヨハネ 23 世を輩出した古い由緒ある大きな施設で、現在は、施設内でカリタスが活動しており、ウクライナからの避難民の女性や子供 60 人を受け入れてお世話していたとのこと。

ローマではバチカン宮殿の中の教皇専用の礼拝堂の壁画を制作したマルコ・イワン・ルプニックが主宰する工房アレッティセンターを見学することができ、工房内のチャペルやモザイク加工の作業室を写した写真を見せてくださいました。

説教に優れた聖アントニオで有名なパドヴァにある「スクロヴェーニ礼拝堂」についてのお話は、まずヨーロッパの時代区分「中世」のとりえ方についての基礎知識から。

教科書では古代ギリシャ・ローマ衰退後のゲルマン民族による混乱の「暗黒時代」といわれていますが、そうではなく、イタリア語とルネッサンスの土台となった文化が育まれた時代でもあったとのこと。

ちなみに最初のイタリア語で書かれたのは、アッシジのフランシスコによって 13 世紀に書かれた「太陽の歌」だったそうです。



建築様式ではローマ時代のロマネスク建築から、尖塔アーチを用いた高さのある空間とバラ窓が特徴のゴシック建築が生まれました。

1305 年に完成したスクロヴェーニ礼拝堂も中世イタリア文化の傑作で、ルネッサンス文化の萌芽となりました。

それまでのイコンなどの美術は聖職者による制作で、販売はされず、作者名も明らかにしないものでしたが、ジョットは一般の職業人で、依頼者からの対価も得て制作を行い、このことは新しい時代の節目になりました。

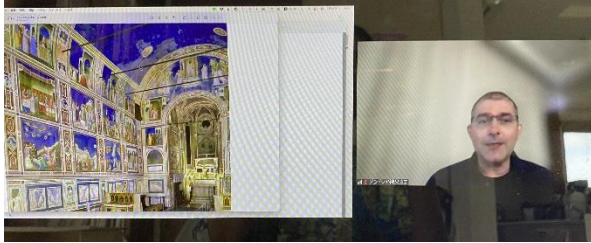
なお、スクロヴェーニ礼拝堂の正面の窓は、イスラム様式の特徴もあるとのこと。ここで時間がきて、ジョットの壁画の解説は、次回のお楽しみとなってしまいました。





2022年9月14日

今日は1か月半ぶりに、再開された船橋学習センター「ガリラヤ」主催のアンドレア・レンボ師の「聖書と美術」講座「スクロヴェーニ礼拝堂/3」をオンラインで受講しました。



まずは前回の復習から。北イタリアのベネチアに近いパドヴァの有力者スクロヴェーニ家により1305年に建てられたこの礼拝堂は、ジョットによるフレスコ画が描かれていて、美術史上重要とされています。聖職者のみが祭儀を行う内陣が区切られているのは、当時の教会の考え方に拠るのであって、第2バチカン公会議以降の聖堂は、区切りはなく会衆を抱き包むような様式になっています。



礼拝堂のジョットの絵は、右壁上部の聖マリアの生涯からイエスの生涯へと展開していきませんが、今回はマリアの両親ヨアキムとアンナの物語から始めました。

マリアについては、その両親はもちろん、誕生と生い立ちも、「正典」の福音書にはなく、「外典」すなわち紀元140~170年に成立したヤコブの原福音書に「物語」の形であるとのこと。中世では、トリント公会議（16世紀）で「正典」が定められるまで、「外典」の物語も広く信じられてきました。

なお、講座のテーマは「アナウイムの物語」（って何？・・・）。

マタイ 5-3 の山上の垂訓の言葉「心の貧しい人々（は幸いである）」（新共同訳）は、フランシスコ会訳では、「自分の貧しさを知る人」。経済的貧困だけでなく、「へりくだり」、神への謙遜の心をもっていることを指し、当時のヘブライ語で「アナウイム」といわれ、その人々に神の慈しみが表されるとのことです。マリアの両親の物語は、この「アナウイム」の物語です。



神殿から追われるヨアキム



羊飼いに身を寄せるヨアキム

ヨアキムは、高齢になっても子がなく、当時不妊は差別の対象であり、神殿からも追い出され、羊飼いに身を寄せるが、妻のアンナへの受胎告知があり、ヨアキムの捧げものも神に受け入れられる。妻アンナの妊娠を夢で告げられたヨアキムは、「黄金の門」でアンナと愛の再会をし、喜びに包まれる。



アンナへの受胎告知



神に子羊を捧げるヨアキム



ヨアキムの夢



黄金門の出会い

子に恵まれないことが差別されるなんて、現代では不当なことです。が、新旧福音書はその時代の社会を反映していて、それを乗り越えようとするが、その限界を表すこともあります。

高齢で不妊の夫婦が救われる例は、新約のルカ1章にある洗礼者ヨハネの両親ザカリヤとエリザベトの話に共通しています。

社会から不当に差別されたヨアキムとアンナは、まさに「アナウイム」、神が幸いへと導かれる人々でした。

2022年9月28日

今日は、船橋学習センター「ガリラヤ」主催のアンドレア・レンボ師の「聖書と美術」講座「スクロヴェーニ礼拝堂」の4回目をオンラインで受講。前回はマリアの両親の物語でしたが、今回はその続きのマリアの誕生と受胎告知、エリザベト訪問までの物語です。



マリアの誕生から婚約までの物語は、正典の4福音書にはなく、マリアやイエスの目撃者も絶えた140~170年に成立した外典に基づく。信すべきというより、新・旧約聖書の逸話にオーバーラップする記述は、「貧しい人・へりくだる人は幸い」という「アナウイム」の物語として理解すべきなのでしょう。

礼拝堂の最上段の絵は、右壁のマリアの両親の物語から左壁の後ろへと移り、「マリアの誕生」と「神殿奉献」、そして「マリアの婿選び」「求婚者の祈り」「マリアの婚約」「婚約の行列」と展開します。

図8の「マリアの誕生」の場面では上部がアンナの産んだ赤子のマリアを貴婦人が抱こうとしています。この女性は、スクロヴェーニ家の奥方の姿で、ルネッサンス期の絵画では、絵の依頼主の肖像を描きこむこともよくあったそうです。その下では、この赤子を助産婦が世話していますが、この構図はイエスの誕生を描いた古いイコンの伝統を踏襲しています。

図9の「マリアの神殿奉献」は幼子イエスの奉献と重なりますが、当時の修道院に入る少女とその家族の姿でしょう。



図8 マリアの誕生

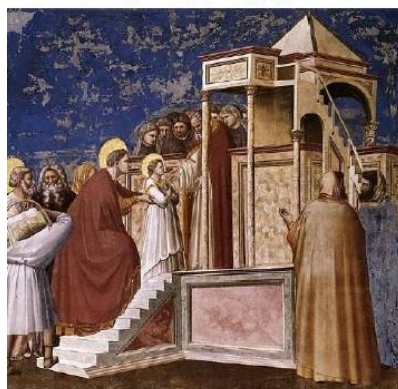


図9 マリアの神殿奉献

図10~12はマリアの婚約者としてヨゼフが選ばれる物語で、求婚者たちは各々1本の枝を祭壇に捧げ祈った後、その枝を持ち帰ると選ばれた人の枝には花が咲くとの逸話で、その根拠は、旧約の「イザヤ書」の「エッサイの株から芽が出て若枝が育ち、その上に主の霊がとどまる」に基づきます。

図13「婚約の行列」の後の「マリアの受胎告知」は祭壇を分ける正面アーチ型下り壁の重要な場所に、天使が左、マリアが右というイコンの伝統に基づき描かれています。

正教会の伝統では、祭壇と会衆の席を分けるイコノスタシス（聖障）があり、その扉の上には受胎告知のイコンが掲げられます。この礼拝堂ではこのイコノスタシスの伝統を取り入れていますが、これは祭壇で行われる聖変化とお告げの神秘がともに、受肉の神秘として再現されているからです。



図10 マリアの婿選び



図11 求婚者の祈り



図12 マリアの婚約



図13 婚約の行列



正面の受胎告知を過ぎてまた右壁に戻ると、図15の「エリザベト訪問」の絵へと続きます。

マリアが旅をして、洗礼者ヨハネを身ごもっていたエリザベスを訪ねます。その様子を医者であったルカは、「マリアの挨拶を聞いたとき、その胎内の子がおどった」と記述しています。それはまたマリアの胎内のイエスとヨハネの出会いであり、「新約」と「旧約」の出会いでした。

ジョットはその喜びを、マリアとエリザベトが目を合わせ見つめあう姿で表現しています。



図14a 受胎告知の天使を遣わず神

図14b 受胎告知



図15 エリザベト訪問

2022年10月12日

船橋学習センター「ガリラヤ」主催のアンドレア・レンボ師の「聖書と美術」講座「スクロヴェーニ礼拝堂」の5回目をオンラインで受講しました。



今回からいよいよ、ジョットの作品もイエスの生涯のテーマに入ります。

そのスタートは、(前回(9/28)の復習になりますが、)祭壇手前の上のアーチ壁に描かれた受胎告知(⑭a, b)とそれに続くその右下の「エリザベト訪問」⑮となります。

ジョットによるこの聖堂壁画の構成は重要で、正面最上部の「永遠のいのち」①の場面を終着点とし、その出発点としてイエス誕生の予告としての受胎告知の場面をおき、神の救いの企画が始まります。

ここに受胎告知の場面が置かれるのは、イコンの時代の伝統であり、東方教会(正教会)では現在でも、司祭が聖変化の祭儀をおこなう内祭壇を区画するイコノスタシスの扉に受胎告知の絵が飾られ、パンとブドウ酒の神秘のうちに人間となられる受肉の神秘とのつながりと、その再現をあらわしています。



その伝統を意識したジョットの構成は、「み言葉は人となった」(ヨハネの福音1)ことを、マリアへのお告げとご聖体へのつながりで示しています。

受胎告知⑭右下のマリアのエリザベト訪問⑮は、胎内の洗礼者ヨハネとイエスの出会いを通して、旧約と新約のバトンタッチが表され、右壁の「キリスト生誕」⑯につながっていきます。

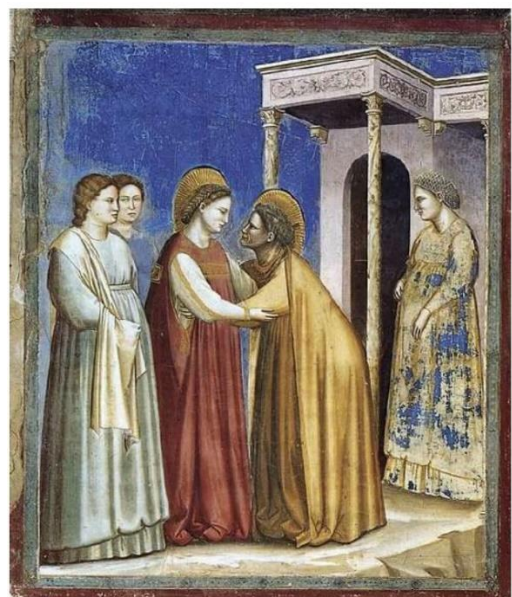


図15 エリザベト訪問

そして受胎告知⑭から「神殿での少年イエス」⑰までの8つのテーマは、ルカ伝とマタイ伝から採られていて、その内容には、イエスの受難と復活の予告が込められています。

「キリスト生誕」⑯は、天使に導かれて羊飼いが「飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた」ルカ伝2章の場面。命のパンが入った「飼い葉桶」は、また埋葬のための棺桶を暗示させる。

続く「東方三博士の礼拝」⑰は、マタイ伝2章の場面。三博士の捧げる黄金は「王」（ダビデの王座）、乳香は神への捧げ物（神の子）、没薬は受難を表す。

「幼児キリストの神殿奉獻」⑱は、ルカ伝2章。「神の救いを見た」シメオンは、母マリアに「剣で心が刺される」であろう受難を告げる。



図16 キリスト生誕



図17 東方三博士の礼拝



図18 幼児キリストの神殿奉獻



図19 エジプトへの逃避



図20 幼児虐殺

「エジプトへの逃避」⑱と「幼児虐殺」⑳は、マタイ2章。エジプトはイスラエルの民がかつて奴隷であった故地であり、そこからの難民の姿の聖家族は、今も世界が現実直面する「アナウイム（困窮者）の物語」。エジプト逃避の背景となったヘロデによる残酷な幼児虐殺の場面も、今もロシアによって起こされている姿で、根本的な世界の現実を表しています。

「神殿でのキリスト」㉑はルカ伝2章。12歳になったイエスがエルサレム巡礼の帰路、両親と離れて神殿で学者たちと問答をしている場面で、心配する親心とイエスの「どうして私を探すのか」という言葉が、突き刺さってきます。（きっとしっかり親に叱られたことでしょうか・・・）



図21 神殿でのキリスト

ジョットの絵の特徴は、イコンの伝統を引きながら、登場人物の服装や背景の建物などに同時代の風俗を描写していることで、ルネッサンスの時代の息吹を感じさせてくれます。

2022年10月26日

午前中、船橋学習センター「ガリラヤ」主催のアンドレア師の「聖書と美術-スクロヴェーニ礼拝堂」をオンラインで受講しました。



今回のテーマは、イエスの生涯。イエスが民衆の群れに初めて登場する「キリストの洗礼」、イエスによる七つのしるしのうち、最初の「カナの婚礼」と最後の「ラザロの復活（よみがえり）」の奇跡、そして受難の入り口となる「エルサレム入城」の4つの場面をジョットは選んでいます。

3つの共観福音書（マルコ・マタイ・ルカ伝）では、イエスが民衆と共に洗礼者ヨハネから洗礼を受け、神の「愛する子、心に適ったもの」という声が聞こえたと述べているが、そもそも罪のないイエスが洗礼を受ける必要はあるのかという問いが、初代教会のころからあり、ヨハネの福音では「聖霊が降るとどまる人が洗礼を授ける人である」と洗礼者ヨハネは述べ、イエスが洗礼を授かるという記述はない。

図22 キリストの洗礼



ジョットの作品は、真ん中にイエス、その右に洗礼を受ける洗礼者ヨハネ。上部に聖霊が降り、左に天使がイエスの衣を持つ。衣の色は、イコンの伝統で人性を表す赤色と神性を表す青色である。右手には、二人の弟子。ヨハネの記述から、その一人はアンドレアであり、もう一人は「イエスの愛弟子」（ヨハネ福音書著者？）らしい。

「カナの婚礼」では、ジョットの時代の宮殿の一室を背景に、食卓の左にイエスと愛弟子とアンドレ、右端のマリアの姿はイコンの伝統に従った当時の服装で、新郎新婦や給仕の召使はジョットの時代の服装で描かれている。指図するイエスの右手は、新しいブドウ酒の創出、すなわち新約の到来を示している。

図 23 カナの婚礼



図 24 ラザロの復活



「ラザロの復活（よみがえり）」は、ヨハネ 11-28~37 の話。「イエスは涙を流された」その悲しみと寂しさの極みに対して、神の力によるしるしがあらわされた。この世へのラザロのよみがえりは、この後のイエスの復活を予言しているが、そのよみがえりとイエスの復活は同じではない。どちらも神のみわざであるが、復活したイエスは、永遠の命に入られたのであり、その姿は元の姿ではなく、次の世に生きておられる。

「エルサレム入城」も、やはり、ロバに乗るイエスと従う弟子たちはイコンに伝統的な服装、迎える民衆の姿はジョットの時代の姿である。背景の門は今もエルサレムにあるとのこと。

ラザロの事件を目撃したユダヤ人の多くがイエスを信じたことに、恐怖を感じた祭司長やファリサイ派の人々はイエスを殺すことをたくらむが、過越しの祭りを迎えるためにエルサレムに入城するイエスたちを民衆は熱狂的に迎え入れる。受難を前にしたこの場面をジョットは、ドラマティックに描いている。

図 25 キリストのエルサレム入城



さて、ジョットの作品はその後、受難と復活を描いていますが、このテーマのアンドレア師の講座は昨日が最後。また来年 2023 年に、違うテーマで再開されるそうです。